

1 研究主題

学びに向かう力を育む音楽の授業を目指して

2 はじめに

本研究会では、平成 25 年度から「自己・教材・仲間とかかわり、学び合う授業」、「子どもたちが輝く音楽の授業」を主題に研究を行ってきた。系統的に〔共通事項〕を指導してきたことで、児童生徒が音楽を形づくっている要素を知覚し、思いや意図をもって表現したり鑑賞したりする姿が多く見られるようになり、研究の一定の成果を感じることができた。しかし、1 時間 1 時間を楽しむことができるものの、学んだことを次につなげ関連づけて学ぶことや、自ら課題を見つけ学び深めていくまでには至らず、次の時間につなぐ、領域と領域や、単元と単元をつなぐ等、学びをつなぎ、自ら課題を見つけ深めさせることが新たな課題だと考えた。この新たな課題を解決するために、令和 2 年度より「学びに向かう力を育む音楽の授業を目指して」を、新たな主題として取り組んできた。

3 研究経過

研究推進委員会が中心となり、愛知教育大学 新山王政和教授にご指導いただきながら授業研究を行った。児童生徒の学びを「点」で捉えるのではなく、「線」で結んで捉えていくことができるような、プロセスを重視した指導を充実させ、学びから得たものを、次の学びや今後の社会や生活に生かそうとする、学びに関する前向きな情意、つまり「学びに向かう力」を育てていくことを目指して授業づくりをしていくべきであると考え、実践を報告しあった。音楽科という教科の特質を生かし、共に試行錯誤して音楽表現を創り上げたり、感じたことや考えたことなどを伝え合って、さらに一人一人の音楽性を豊かに高め合ったりすることを、『共創（きょうそう）』と位置づけ、授業づくりをしていくこととした。

4 研究の概要

研究を進めるにあたり、具体的な手だてとして以下の 3 点に重点を置いて、「主体的・対話的で深い学び」の視点をもった授業づくりを行った。

(1) カリキュラムデザイン

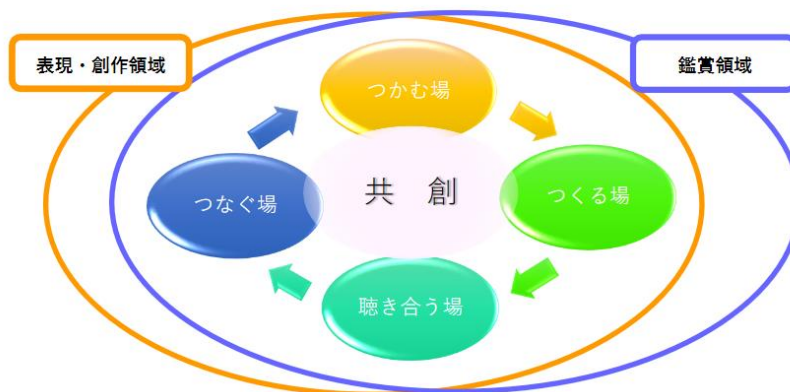
複数の領域の題材で構成し、次の題材においても発展的に学ぶことができるよう、歌唱から創作へ、鑑賞から器楽へなど領域をまたいで学びを往還させる単元構成を行った。1 つの題材のみで学びの定着を図ることは容易ではないため、領域を往還し音や音楽及び言葉によるコミュニケーションを図りながら、主体的・協働的に音楽表現や鑑賞をする楽しさを体験させ、自己の学びをふり返り、次の学びへの見通しをもたせることで、「学びに向かう力」を育み高めることを目指した。目標とゴールを明確にしてデザイン

した結果、児童生徒が試行錯誤しながらじっくりと粘り強く活動する姿が多く見られた。教材研究によって、児童生徒の学びに向かう理想の姿をイメージし、そのイメージを実現させるように、場の設定や評価規準の設定等の具体的な授業づくりにつなげていくことができた。

(2) 場の設定と見通し・ふり返し

1 単元の中に、「つかむ場」、「つくる場」、「聴き合う場」、「つなぐ場」の4つの場面を構成し活動を進めることで、音楽の見方・考え方を働かせながら段階的に資質・能力を育むことができると考えた。まず「つか

領域をまたいで往還するカリキュラムデザイン



む場」では、題材において試行錯誤するポイントとなる音楽の要素を知覚してそれらの働きから生み出され感受される、特質や雰囲気などの曲想との関わりについて知る場とする。次の「つくる場」では、ICT機器を活用し録音や録画をするなどして、客観的にモニタリングすることで調整していきながら、音楽の要素をどのように働かせれば、思いや意図を表現できるのかについて、試行錯誤しながら練り上げていく。さらに、「聴き合う場」では、実感を伴いながら練り上げた表現や、感じたこと・考えたことを、互いに聴き合い伝え合い、新しい気づきを得ることによって学びを深めていく場とする。最後の「つなぐ場」では、授業1時間単位のふり返しを参考にしながら、題材全体を改めてふり返ることを通して、「どの場」の「どのような活動」によって、「どのようなことを学び深めることができたのか」を捉える場とする。単元や題材の見通しをもたせて取り組ませることができた。場をワークシートに示したり、めあてとともに板書したりするなどし、児童生徒に場を意識させる工夫をしてきた。小学校高学年や中学生は、ワークシート等に記録した学びを見返しながら、次の場に生かして試行錯誤のポイントにすることができた。小学校低学年では、前時の学びを想起させるように、板書や発問等で教師がつなぐ工夫をした。この単元で、またこの時間に「何ができるようになったらよいか」を意識し理解することで、児童生徒の音楽活動に向かう主体性が向上した。

ふり返しについては、指導のポイントを教師間で改めて共有した。ふり返りの意義や視点を示し、自己を客観的にモニタリングしながら記録するように、繰り返し継続的に指導した。児童生徒が

○曲の良さを味わう活動に、主体的・協働的に取り組もうとする。			
	学習活動の振り返り	仲間と	学習内容の振り返り
つかむ	4月13日	目標「花」を聴いて歌の旋律を確かめる	花の曲の2段目ののびやかさが、分が1音3つに上がっていて、苦つけすぎるのが問題だと分かりました。3音の最後には1つ1つの音がばり見るのではなく、全体として考えることが大切だと思います。
	4月20日	目標情景を思い浮かべる 歌詞がわかる	友達が時間の流れがありそうだと、言ってくれたので2番の歌詞で後明ける方になっていることが分かりました。それ、羽衣ちゃんかと思いましたが、他に誰か登場人物がいるか、いないかは分かりませんでした。

ふり返りを共有したり、教師が試行錯誤しながら練り上げていくプロセスに価値付けを行ったりすることで、児童生徒の音楽活動に向かう主体性が向上した。

(3) 言語化の足場かけ



常に知識・技能と思考の往還が必要とされる音楽科において、知覚（音楽を形づくっている要素）と感受（それらが生み出す特質や雰囲気）を結び付けて言語化しコミュニケーションを図ることは、学びを深める上で必須である。しかし、目に見えない音を捉え、言語化する

ことは容易ではない。〔共通事項〕を知識として認識したり、感覚的に捉えたりすることはできても、捉えたことを言語化して他者に伝えることは苦手を感じている児童生徒が多い。そのため、発達段階に合わせて身体表現活動を積極的に取り入れ音を可視化させた。小学校低学年では走ったり歩いたり体を動かしたりすること、高学年では指揮をしたり手拍子をしたりすること、中学校ではボールやスカーフ等を動かすことなどを取り入れた。「どうしてその動きをしたの？」や「どんな気持ちでそうしたの？」と教師が問いかけて考えさせることで、初めて言語化されていくことがわかった。共創する過程で、同じ部分について語っていても児童生徒に、個々の捉え方、個々の表現の伝え方があった。児童生徒の表情を見取り、言葉や音の一つ一つに心を寄せて聴き、教師も児童生徒とともに共創する仲間となって授業を楽しむことができたと感じる。言語化の足場かけは、私たち教師にとっても新しい気づきと発見をもたらしてくれた。



5 今後の課題

この3年間、活動の制限によって、大幅なカリキュラム変更を余儀なくされたが、私たちはこのピンチをチャンスと捉えて、本研究に取り組んできた。鑑賞と創作の領域に重点を置いて研究したことで、新しい気づきが多く生まれ、子どもたちの学びに向かう力を育むことができた。そして、子どもたちのもつ豊かな感性を再認識することができた。今後は教材研究を綿密に行い教師自身の音楽経験を豊かにすることで、児童生徒が音楽表現・身体表現・言語表現等で伝えようとしている思いや意図を汲みとり、広げられるような、教師の見取りの力を養いたい。子どもたちには、共創する経験と音楽的な見方・考え方を働かせて培った学びに向かう力を生かして、歌唱や器楽でも思い切り表現活動させたいと強く願う。今後も、音や音楽、音楽文化と豊かに関わる資質・能力を育むことを目標に、子どもたちとの共創を続けていきたい。